

# つじうら売りのおばあさん

小川未明

青空文庫



ある日、雪のはれた晩がたでした。

「きようは、義雄さんの家のカルタ会だ。」というので、みんなは喜んでいました。

達夫くんは、おとなりのかね子さんをさそつて、いくことになつていました。

入り日が、赤く雲をそめて西にしみますと、雪のつもつた山のかげがまっ黒になつて見えました。いよいよ出かける時分には、雪の上がこおつて、歩くとさらさらと音がしたのです。

「このあいだ、僕の家のカルタ会でお顔に、すみをぬられなかつたのは、かね子さん一人だけだろう。かね子さんは、えらいなあ

。「と、達夫くんは今夜また負けて、おしろいやすみをぬられるのかと思うと、なんだか自分はいつも負けて、はずかしい気もちがしました。

「達夫さん、私と組みになりましようね。私ひとりでたくさん取るからいいわ。あんたは自分の前だけよく見ていらつしやいね。」と、かね子さんはいいました。

しかし、達夫くんは女なんかからかばわれるのを、名誉とは思わなかつたのです。

「僕、カルタには負けるけど、すもうを取ればいちばん強いんだがなあ。」と、歩きながら達夫くんは力みました。

その晩のカルタ会は、なかなかにぎやかだったのです。カルタ

につかれた時分じぶん、おすしや、あまぎけや、みかんや、お菓子かしなど  
 が出でました。それを食たべてからあとは、火鉢ひばちをかこんでお話はなしに花  
 がさいたのであります。

「つじうら売うりのおばあさんの顔かおを見みた人ひとがある？」と、だれや  
 らがいうと、たちまちその話はなしでもちきりになりました。

このごろ、町まちの方ほうから毎まい晩ばん、雪ゆきのふるときも、風かぜのふくとき  
 も、かかさずに村むらへはいつてくるつじうら売うりがあります。その  
 声こえを聞きいただけでは、女おんならしいが、なかには男おとこだというものもあ  
 り、またおばあさんだというものもあれば、まだ若わかい女おんなだとい  
 うものもあって、うわさがとりどりであります。まれにつじうら  
 を買かったものも、ちようちんの火ひでははつきりすがたさえわから

ないのに、あたま頭からきれ布をかぶってかお顔をかくしているというのでした。

「まだ、今夜こんやはやってこないね。」と、一人ひとりがいうと、

「どうして今夜こんやはこないのだろう？」

「いや、もうじきにくるだろう。」と、おばけかなんかのように、そのつじうらう売りの正しょうたい体がわからないので、きみ気味わるがつていたのです。

「きたら、だれかで出てか買わないかな。」と、義雄よしおくんがいました。

「いちばんカルタにま負けた人ひとが、で出てか買うことにしよう。」と、ゆうじ勇二くんがいました。

「だれだろう？」と、みんなはおたがいのかお顔を見みまわしました。

そして、いちばん、すみやおしろいの多くついている顔を、さがし出だそうとしました。

「ああ、達夫たつおさんだ。」と、女おんなの子この一人ひとりがさけぶと、

「達夫たつおさんだ！」

「達夫たつおくんだ！」と、口々くちぐちにいつて、いちばんすみやおしろいのたくさんついているのは、達夫たつおくんにきまつたのでした。

「ただ、つじうらを買かったばかりではおもしろくないから、女おんなかよく見みとどけることにしようじゃないか？」と、まただれかが難問なんもんを出だしたのであります。

「さあ、たいへんだ。達夫たつおさん、できて？」と、義雄よしおくんのお姉ねえさんが美うつくしい顔かおで笑わらいながらおっしゃいました。

そういわれたので、達夫たつおくんは顔かおが赤あかくなりました。なぜなら、日ひごろから自分じぶんは強いつよのだと自信じしんしているだけに、いまさらはずかしくもできないなどと、弱音よわねをはきたくはなかつたからでした。

「達夫たつおさん一人ひとりでは、かわいそうだわ。」と、かね子こさんがいいました。

「じゃ、かね子こさんもいつしよにおいきよ。」と、だれかがからかいました。

「私わたし、こわいわ。」と、かね子こさんは身みぶるいしました。

ちょうど、このとき、風かぜの音おとがして、そのあいまにとおくの方ほうで、「つじうら、つじうら。」という声こえがしました。

「ほら、きた！」と、みんなは恐おそろ半はん分ぶん、おもしろ半はん分ぶん

に、おどりがりました。

「僕ぼく、いこうか？」と、達夫たつおくんは小さい声こえで、かね子こさんにい  
うと、

「私わたしもいつしよにいくわ。」と、かね子こさんは、小さい声こえで答こたえ  
ました。

「いいよ、僕ぼくひとりで。」と、達夫たつおくんは強つよくいいました。

「つじうら——つじうら。」

だんだんその声こえは近ちかくなって、もうまもなく、この家うちの前まえにき  
かかっていました。

「僕ぼく、つじうらを買かつてくる！」と、ふいに達夫たつおくんは立たちあが  
りました。

「えらいなあー！」と、なかにはびつくりして、声をたてるものもありません。

達夫くんは、さむい星ばれのした外に出て、戸口に立っていました。やがて、あわれな黒いかげがとぼとぼと雪道をちようちんの火でたどつてくると、もう恐ろしいなどということをおぼわすを忘れて、「おじいさん、つじうら……。」といつて、おあしを出しました。あわれなかげは、立ちどまりました。暗いちようちんの火は、わずかに、しなびた手をてらしました。

「おじいさんではありません、おばあさんですよ。坊ちゃん、さむいからかぜをひかぬようになさい。」

そういつて、そのあわれなかげは、またとぼとぼといつてしま

いました。

達夫くんは、目の中にあついなみだのわくのをおぼえました。

そしてしばらくそのうしろすがたを見おくつていと、

「つじうら——つじうら。」と、そのおばあさんの声<sup>こゑ</sup>がたよりなく風<sup>かぜ</sup>に消<sup>き</sup>えていきました。

このとき、にぎやかな家<sup>うち</sup>の中<sup>なか</sup>から、

「達夫<sup>たつお</sup>さん。」「達夫<sup>たつお</sup>さん。」と、みんなが自分<sup>じぶん</sup>の名<sup>な</sup>をよんでい  
るのがきこえました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「つじうら売《う》りのおばあさん」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# つじうら売りのおばあさん

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>